

WINDS CAFE 347

**Maguro geijutsuka no ie studio
Hiroshi Yokoyama Harpsichord Recital
J.S. Bach: Goldberg Variations
Sunday, November 16, 2025**

WINDS CAFE 347 in 目黒
横山博チェンバロリサイタル
J.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」

2025 年 11 月 16 日 (日) 16:00 開演
目黒・芸術家の家スタジオ

Program

Johann Pachelbel:

ARIA Secunda (Hexachordum Apollinis)

Jhann Sebastian Bach:

Clavier Übung bestehend in einer ARIA

mit verschiedenen Veraenderungen vors

Clavicimbal mit 2 Manualen

“Goldberg Variations, BWV 988”

J.バッヘルベル：

アポロンの六弦琴『第 2 アリア』（ホ短調）

J.S.バッハ：

クラヴィーア練習曲

二つの鍵盤を備えたクラヴィチェンバロ

のための種々の変奏を伴う『アリア』＊

（通称「ゴルトベルク変奏曲」BWV988）

＊第 15 変奏と第 16 変奏の間に、15 分間の
休憩を挟みます

本日の公演に合わせて、1741 年初版に基づく楽譜ファクシミリ（1,000 円）を受付にてご用意しております。地図を広げるように楽譜を眺めながら音楽をたどることができます。



メッセージ1 | 2025.10.18

横山博

このたび、バッハの『ゴルトベルク変奏曲』を人前で初めて演奏する機会をいただきました。WINDS CAFE の存在、応援してくださる皆様、そして主催の川村龍俊様のご厚意に、心より感謝申し上げます。

この作品では、しばしば「演奏時間」と「テンポ」が話題になります。川村さんから「あなたのことから、きっとゆっくり弾くのでしょうか」と言われて、「それは、誰と比べてですか?」と返す勇氣はありませんでした。多くの人が無意識のうちに、カナダのピアニスト、グレン・グールドの有名な録音を基準として聴いているのは隠しきれない事実でしょう。

いまでは『ゴルトベルク変奏曲』は長大な作品として受け止められていますが、1955 年のグールドのデビュー録音は、すべての繰り返しを省略し、前半と後半を LP の A 面・B 面に分けて、38 分で収められました。

当時の LP (12 インチ・マイクログルーヴ) は 1948 年に登場し、片面 22~23 分、両面で約 45 分が音質を保てるギリギリのラインとされていました。録音現場では「1 面 14~20 分が理想」とも言われていたそうです。つまり、1955 年版のグールドのテンポ設定は LP 「40 分前後に収める」という技術的制約から逆算された可能性が高いと思います。LP 録音には、繰り返しの省略だけでなく「演奏を速める事」という実務的な要請があったわけです。結果として、痛快でエキセントリックなグールド盤は大ヒットし、70 年を経た今もピアノ界だけでなく古楽の世界でも揺るぎない比較軸として残っています。

1982 年、コンパクトディスクの登場が、新たな時間の枠を持ち込みました。CD は当初、再生時間を約 74 分と想定して設計されました。この約 74 分という仕様は、当時の技術的な落としどころで、「第九

交響曲が収まる長さ」という一般常識は、カラヤンを広告に起用した SONY の宣伝コピーにすぎなかったようです。現在、Spotify での再生回数を見ると、グールドの 1981 年版の「Aria」が 2024 年時点で 1 億回超え。カラヤンの《第九》第 4 楽章は約 455 万回でした。

ジョン・ケージはレコードの存在を、パッケージ化された「音の缶詰」と呼びました（「トイレットペーパーの芯」だったかもしれません）。大西穰さんの本によれば『4 分 33 秒』は、当初は SP レコード（約 4 分半）に収める想定で構想されたともいわれます。CD (Red Book 規格) の最大収録時間は、およそ 74 分であって、厳密には「74 分 33 秒」である。そんな話、誰が信じるのでしょうか。

今回チェンバロを運搬してくださる梅岡俊彦さんの情報によると、ジョン・ケージは、『ある人物』を通じてすでにチェンバロに触れていたそうです。もしかすると、プリペアドピアノの発想にも関係があったかもしれません。そういったことも、11 月 16 日（日）の WINDS CAFE では「ゴルトベルク変奏曲」の初版の楽譜とあわせて、この続きを書けたらと思っています。

メッセージ2 | 2025.11.12

横山博

「前田さん! *, ぼく、この続きを 16 日のプログラムに書くって宣言してしまったのですが、プリペアドピアノとチェンバロがぜんぜん関係ないことがあとから分かったりして、僕の代わりに何かに書いてくれないませんか?」

「1 字 10 円とか...」

*前田さんは僕のソウルメイト、ではなく、もう一人の横山博です。正確にいうと横山博は前田智成改です。（文中、やたらと演奏会の宣伝をしてくれていますが、そんな野暮なことは頼んでいません。やさしさの安売

りパターン。親切の「切」が「切ない」方の Cut と出てしまうあたりが旧横山博である証拠です)
旧横山博、前田智成の真に優れているところは、つねに自分の肩書きを「リスナー」としていることです。リスナー。感じの良い言葉です。

横山博演奏会プログラムに寄せて

前田智成 (リスナー、ドイツ語通訳)

「チェンバロを弾いていればそれで幸せ」だと横山博は語ります。一般リスナーとしては、ジョン・ケージの「4 分 3 3 秒」を複数回、モートン・フェルドマン作品などと併せてピアノ演奏会を開催し、聴衆に届けているという稀有な存在の鍵盤演奏者として認識しているため、意外な言葉に感じられました。

このところは、小杉武久の“Instruction Works”やオノ・ヨーコ“Grapefruit”から取り上げたピースのパフォーマンスで、音楽と音楽外の境界を拡張する活動が目立ちます。今年 5 月 11 日に代官山ヒルサイドテラスで開催されたものの記録映画が 11 月 19 日(水)19:00~に、渋谷イメージフォーラムで上映されます。オノの“Cut”ピースで舞台の横山さんと登場する客の間のインタープレイは息を飲む緊張感に満ちる瞬間があり、見ものです。ぜひ足をお運びください。

小杉の“Instruction Works”は、ふとした偶然で私から横山さんに差し上げたのでした。ある時期、神宮前を毎日歩き回り、あらゆる店舗をしらみつぶしに見て回ったことがあったのですが、名前は以前より知る GALLERY360° [JINGUMAE]で小杉武久展が催されており、その最終日でした。そこで“Instruction Works”が販売されていて、その素晴らしいさと「これは誰かににとって重要な本になる」と直感し、自分の分に加えて計 2 冊を購入しました。ほどなく、横山さんの活動が思い浮かび、直接会って手渡したのでした。その後これを丹念に読み込んだ彼が演奏会に異色のピースとして組み込んでいることは既知の通りです。「異色のピース」と受け取るの

はリスナーの受容の限界を吐露しているに過ぎず、“Art Into Life, Art In Everyday”のフルクサスの精神からすれば「異色」ではないということになります。

また横山さんは「20 世紀アメリカ実験系は何も詳しくない。ジョン・ケージを動められたから味見してみた。そうしたら上手い人より上手いと褒められた。好きも嫌いも、売れるのならやる他はない」とも述べていて、これを素直に音楽家の販売戦略として聞くべきなのか、自らの活動を一步距離を置いて冷静に語っていると受け止めるのかは理解が分かれるところでしょう。いずれにせよここ 5 年以上の彼のその分野での活動の軌跡はわが国では比類なき実績として高く評価を受けることは間違いありません。取り上げる作品のカタログのみならず、その演奏の精度と表現力についての評価です。驚きとも言えるのが、無音かつ 3 楽章に分かれたケージ「4 分 33 秒」の表現が向上していることを目にしていることです。これはエポックメイキングかと。音はどこに生まれ消えていくのか。音が生まれないはずの無音作品での、横山さんの動き（動かず？）が能楽師のような静かながら強く光る存在感を得ています。次回は 2026 年 1 月 18 日（日）に音響の素晴らしい三鷹市芸術文化センターで体験できます。

このような彼のチェンバロは古楽専修の演奏家とは異なる響きを得ているわけです。共に今日の演奏会を楽しみましょう。

【ピアノ教室案内】横山博クラス開講場所

● 中目黒アートセンター*

〒153-0051 目黒区上目黒 3-12-23-101

● 田道住区センター三田分室（三田フレンズ）他

〒153-0062 目黒区三田 1-11-26

*チェンバロ・レッスン対応

■ レッスン料 30 分 2,000 円～

■ 出張レッスンも行っています

詳細は右 QR から

お問い合わせ・Tel. 03-6303-4504

Email. nakameguro.ac@gmail.com

